「子どもはみんな問題児。」を読んで、自分の保育を見つめなおすとても良いきっかけになった。中川李枝子さんがお母さん方に伝えたい事一つ一つに共感できた。

　「保育のポイントはどうやって遊ばせるか」という見出しの『子どもたちは正直ですから、面白いことには面白いと言いますし、つまらなければそっぽを向きます。』というところは本当にそうだと思った。子どもたちが面白いと思った絵本はほぼ全員が食い入るように見ているし、そうでない絵本は集中し切れていない子が多いのが明らかである。また、子どもたちは『続き』がとても好きで、長い絵本や児童書を読み始めると次の日からの出席率が良い。お気に入りの絵本は何度も読む。また、子どもたちはごっこ遊びが大好きだ。絵本の世界に入り込んだり、自分で想像した世界を創り楽しむ姿はよく見られる。その遊びがより膨らむようなサポートをするように見守ったりもするが『大人は無神経に踏み込んではならない』とある。そこが子どもたちと関わっていく中で難しいと感じる場面であると感じている。それも学年によっても関わり方が異なってくるので、そこも工夫がいるところだ。今年年長担任になって、昨年との違いに驚いている。ままごとなんかも年中児は保育者も加えて遊びたい気持ちが見られていたが、年長児は保育者が見ていると恥ずかしがる子もいる。しかし、その中でも必要なときに適切なサポートができるように目を離してはならない。どのようにしたら子どもたちの遊びを良い方向へ行くかを常に考えていくことをさらに意識していきたいと思った。もう一つ、『おはなし作り』はとても楽しそうだ。年中児では少し難しそうな気がするが、年長児だったら何かテーマを決めてそれぞれイメージを膨らませて面白いお話を作れると思う。是非２学期の保育が始まったら時間を見つけてやってみたい。

　この本を読んで、絵本の大切さを改めて実感した。特に『「読み聞かせ」ではなく、子どもと一緒に読む』というのは、普段保育の場で子どもたちに絵本を読んでいて日々感じていたことだ。子どもたちに絵本を読み聞かせながら、私自身が一番楽しんでいるような気がした。嬉しいことに私が楽しく読んだ絵本やお気に入りの絵本は子どもたちにとっても特別なものになることが多かった。子どもにとって、お母さんという存在はとても大きなものだ。そして私たち保育者も子どもたちの中では上位であると思っている。だからこそ日々子どもたちと過ごしていく中で、アンテナを働かせ、物事を柔軟に考えられるよう試行錯誤していく必要がある。幼稚園の中には素敵な先生がたくさんいるので自信を無くすこともあるがこの本のお陰で、私らしく子どもたちと関わっていきたいと思えた。２学期からも楽しくよりよい保育ができるよう頑張っていきたい。